

修士論文（要旨）

2012年1月

中国人日本語学習者の語彙学習ストラテジーの考察
—上海の大学生を対象に—

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3007

章志翔

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	1
第2章	先行研究	2
2.1	学習ストラテジーとは	2
2.2	語彙学習研究の実態	2
2.2.1	海外における学習者に対する研究	2
2.2.2	日本国内の学習者に対する研究	3
2.2.3	中国の学習者に対する研究	3
2.3	まとめ	4
第3章	予備調査	5
第4章	本調査	10
4.1	調査概要	10
4.1.1	調査協力者	10
4.1.2	アンケート調査	10
4.1.3	半構造化インタビュー	11
4.2	調査結果	11
4.2.1	CM1	11
4.2.2	CM2	17
4.2.3	CM3	20
4.2.4	CM4	26
4.2.5	CF1	30
4.2.6	CF2	35
4.3	アンケート調査と半構造化インタビュー調査の関係	41
4.4	調査全体のまとめ	41
第5章	考察	42
5.1	語彙学習ストラテジーの使用に影響する要因について	42
5.2	現在の語彙学習の問題点	43
5.3	ドラマの利用について	44
5.4	日本語教育への提案	44
第6章	今後の課題	46
6.1	本調査について	46
6.2	調査協力者について	47

参考文献

付属資料

要旨

語彙は「読む・書く・聞く・話す」の4技能全ての基礎である。語彙力の不足は、日本語の習得¹に大きな影を落とす。では、語彙はどのように習得されるのだろうか。適切なストラテジーが使用されれば、学習者の語彙習得につながると考える。今まで、日本国内及び海外における語彙学習ストラテジーに関する研究は多く行われてきたが、中国国内における日本語科の学習者を対象とした研究は限られており、十分とはいえない。

本研究では中国上海における日本語を専攻する大学生を対象に、学習者の語彙学習ストラテジーを調査し、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

1. 学習者が語彙学習をする際に使用しているストラテジー
2. 学習者がマルチメディアを語彙学習のリソースとして活用する場合、具体的にどのようなストラテジーを使用しているか

先行研究としてあげた横須賀(1995)、伴(1989)、金(2006)はそれぞれ、日本国外の学習者、日本国内の学習者、中国の学習者を対象に語彙学習ストラテジーについて考察した。本研究では、中国在住の中国人学習者を対象に、語彙学習におけるストラテジー、及びドラマの活用方法を調査する。

調査は上海のある私立大学の日本語専攻の大学生を対象に実施した。本調査はアンケート調査と半構造化インタビューから構成される。半構造化インタビューの調査対象はアンケート調査で「日本のテレビ番組、映画、ドラマ、アニメーションなどを見る」という項目を選んだ人である。分析では調査協力者の答えから、協力者の語彙学習ストラテジー及びマルチメディアの具体的な使用方法を考察する。

使用している語彙学習ストラテジーについては、アンケート調査で、調査対象者のほぼ全員が項目3の「新しい単語は繰り返し書いたり、読んだりする」を選んだ。このことから記憶ストラテジーが一番多用されていることが分かった。半構造化インタビューから、語彙やテキストを記憶することは学習者が使用している重要な語彙学習ストラテジーの1つで、語彙学習に大きな役割を果たしていることが分かった。日本のドラマの利用については、中国在住の学習者にとって、日本社会及び日常日本語に触れる最も重要なリソースで、語彙量や知識面の拡大の方策として学習者に活用されていることが分かった。人によって、勉強の気持ちで見る学習者、気晴らしとして見る学習者、それぞれいるが、語彙学習にプラスの影響があることが分かった。使用するストラテジーは文を一つ一つ確かめながら聴き取る、繰り返し同じドラマを見る、そのまま聞き流し、文脈で覚えるなどである。

調査の結果から、ドラマを見るなどのタスクを通して、学習者たちは各自多様なストラテジーを使い、必要な語彙を探させる方法を中国の大学に導入すれば、いいのではないかということ、それによって、単なる試験の質問項目を解くために語彙学習をさせるのではなく、運用のための語彙を学習者が自ら探して、自律学習や学習の持続性に対して高い効果があるのではないかという示唆を得ることができた。

¹尾関(2005)においては、目標言語形式の指し示す事象との関係が内在化され、使うべき時と使うべきではない時の区別ができるようになったときに習得だと捉えている。

質的研究としてはインタビューをもっと深くするべきで、フォーロアップインタビューを実施すべきだったと思う。また、教師も対象者に含め、教師と学習者の両方から語彙学習ストラテジーを調査研究していきたいと考えている。

参考文献

大谷尚 (2007) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第 54 巻第 2 号 (2007 年度)

大須賀直子 (2010) 『最近の言語学習ストラテジー研究動向』明治大学国際日本研究第 2 号

岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社

岡崎眸 (1999) 「学習者と教師の持つ言語学習についての確信」宮崎里司・ネウストプニー, J.V. 共編『日本語教育と日本語学習 - 学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版

岡崎正道 (1993) 「ドラマ・漫画による日本語教育」『Artes liberales』第 53 号 pp. 39 - 53
岩手大学人文社会科学部

岡本能里子 (2007) 「未来を切り拓く社会実践としての日本語教育の可能性」『日本語教育のフロンティア：学習者主体と協働』くろしお出版

尾関直子ら (2005) 『言語学習と学習ストラテジー～自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ～』大学英語研究会学習ストラテジー研究会編著 リベール出版

オックスフォード (1994) 宍戸・伴訳『言語学習ストラテジー—外国人教師が知っておかなければならないこと』凡人社

小嶋英夫・尾関直子・廣森友人編集 (2010) 『成長する英語学習者：学習者要因と自律学習』大修館書店

金英実 (2006) 『環境の違いによる語彙学習ストラテジー—中国と日本を比較して—』桜美林大学大学院修士論文 (2006 年度)

佐野富士子・岡秀夫・遊佐典昭・金子朝子編集 (2011) 『第二言語習得：SLA 研究と外国語教育』大修館

鈴木みどり編 (2004) 『(新版) Study Guide メディア・リテラシー【入門編】』リベルタ出版

田中望・斉藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』大修館書店

ネウストプニー, J.V. (1995) 「言語学習と学習ストラテジー」宮崎里司・ネウストプニー, J.V. 共編『日本語教育と日本語学習: 学習ストラテジー論に向けて』くろしお出版

伴紀子 (1987) 「学習者の反応から見た映像教材ビデオとその利用」国立国語研究所『映像教材による教育の現状と可能性・日本語教育映画ワークショップ報告』pp.114-115

伴紀子 (1989) 「日本語学習者の適応する学習ストラテジー」『アカデミア 文学・語学編』47 号 南山大学

伴紀子 (1992) 「言語学習のための学習ストラテジー」カッケンブッシュ寛子 他 (編) 『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会

宮副ウオン裕子 (2006) 「日本語能力試験の波及効果—香港調査から—」『世界言語テスト』国立国語研究所編 くろしお出版

村野井仁 (2004) 「教室第二言語習得研究と外国語教育」小池生夫編『第二言語習得研究

の現在：これからの外国語教育への視点』大修館書店 pp103-122
横須賀柳子（1995）「日本語の語彙における学習ストラテジー」『日本語教育の課題』
pp.219-248 東京堂出版